

「日仏水フォーラム 2010(2010年6月3日)」

から受けたメッセージ

吉野輝雄（国際基督教大学教養学部）

「21世紀は水の世紀である」と言われているが、今回の「日仏水フォーラム」は、「水は21世紀を変える」というメッセージを伝えていた。フォーラムでは、まず駐日フランス大使は経験を交え水の現状に対して明確な見解を述べられ、続いて、世界を代表する水ビジネス会社ヴェオリア J 副社長からは水管理の企業展開と理念についての講演、経済通産省の水ビジネス担当の三橋氏からは海外における日本の水ビジネスの取り組み戦略についての講演、また、アカデミック分野からは気候変動の研究者であり IPCC に関わって来られた小池東京大学教授の講演があった。ここで水問題が確かに 21 世紀の地球的、国際的、国家的な重大課題であることが語られた。

フォーラム出席者の所属・背景は知らされていないが、日本の省庁、大企業の第一線で水問題に取り組んでおられる方、また、様々なかたちで水関連のビジネスに関わって来た団体・企業の方も出席していた様子で、私のように教育機関で水問題を学生たちに伝えて来た者は、実行委員長の高橋裕教授や日仏工業技術会の方々以外には殆どいなかったようだ。そんな私だが、21 世紀の重大な問題に取り組んでいる方々の経験とヴィジョンを聞く機会が与えられて視野が広がり、課題の切実さを知って大きな刺激を受けた。それは、続いて行われた 3 つのセッション「地球温暖化と水資源」「水ビジネスの日仏協力」「水技術の可能性と将来」でなされた 9 つの講演によって水問題のグローバルな広がりや時代変化、また、日仏両国における具体的課題と取り組みが示され、最後まで集中して聴くことができた。

さて、私が今回のフォーラムで新たに知った動きと考え方を列挙し、現在の水問題とは何かをお伝えしたい(視野・認識能力に限界あるただの人間が受け止めたもので、発表者の見解と意思を正確に伝えるものではないことを予めお断りしておく)。

日本の政府関係者から「日本政府は、“五省の壁をなくして”水問題に取り組む必要がある」という発言があり、水が政治を変える可能性を予感した。実際、総務省がタガを外し、“官民一体”水政策を取ろうとしている。また、東京都(水道局)は、日本の秀でた水浄化・管理技術を輸出しよう動き始めた。仏国の水メジャーは、世界上下水道の基本戦略として PPP(Private Public Partnership)方式による民営化(官民の責任を区別)を目指している。日本は、技術を輸出(移転)するだけでなく、維持・管理方法込みで輸出するグローバル水ビジネスの時代(100兆円市場)に向かっている。この競争に勝つには 21 世紀型人材と実績に裏付けられた人脈が条件だ。一方、水資源の 7 割を占める農業用水を再生水で賄う方法を開発することが世界的

水不足問題の解決に必要と言われているが、未開拓の現状にある。まず、雨水は資源であるという認識が必要だ。すでに雨水の「地下ダム」が日本で造られている。下水の再生は、水浄化だけではなくメタン発酵によるバイオガス化、肥料化できる元素の回収可能なリサイクルシステムを目指す（仏国では実用化されている）。資源を「利用」するだけでなく地球の特性を考慮した「再生」技術の開発が 21 世紀の課題だ。アジア地域の多雨と地中海の寡雨は上層大気に関連している事が地球科学者により最近解明されている。農業に必要な水、生態系に必要な水は「地球温暖化による気候変動」によって変化する（水不足地域と豪雨地域が現れる）。そのような地球の水と柔軟に対処し、新たな水とのつき合い方を築く時代となっている。

最後に、市民の立場から今回のフォーラムについての感想を述べる。上記のように、水は今世紀の重大な国家の課題であり、ビジネスチャンスである。また、気候変動とも関係し、世界的に安全な水が不足する時代に入っている。そのような背景が今回の水フォーラムに集った人々の共通の関心であったかと思う。私もその一人である。しかし、基本的な視点が欠落していたと言わざるを得ない。それは、水が国家、ビジネスを超えて人間、動植物の生命を支え、地球環境そのものであるという視点、茶道に代表される水によって育まれて来た日本の文化、海の恵みによって支えられている日仏両国の食文化、水の豊かな国の農業漁業の中で生まれた日本の盆踊りや浮世絵、仏国の音楽・絵画芸術と人間生活との関係、そして、21 世紀の青少年、市民に水問題を伝えるための「水リテラシー」等の課題は取り上げられなかった。両国の相互理解がそこで深まるはずなのに。今や国家利益を超えた協力、共生の課題を追求する世紀ではないのか？世界人口が 70 億人を超えようとしている今、20 世紀とは全く違う理念と方法を創造する時ではないのか？フォーラムで国家、企業、人間を中心にして議論されるのは当然であるが、「水を主語とする」議論も同時に行われなければ未来展望が持てない時にあることを、水自身がわれわれにメッセージとして伝えようとしているのではないかと私は感じた。